

授業日時/教科・単元 2013年10月11日 / 大造じいさんとがん

授業者 恒任 珠美 教材作成者 椋 鳩十

1. 児童生徒の学習の評価（授業前後の変化）

(1) 3名の児童生徒を取りあげて、同じ児童生徒の授業前と授業後の課題に対する解答がどのように変化したか、具体的な記述を引用しながら示して下さい。実技教科等で児童生徒の直接の解答が取れない場合は、活動の様子の変化について記して下さい。

児童生徒	授業前	授業後
1	がんは、頭がいい。 ⇒大造じいさんではなく、がんの賢さやがんの行動にまず、引きつけられて読んでいった。	残雪と戦っていくにつれ、大造じいさんが残雪を思う気持ちが大きくなっていく。 ⇒授業後は、残雪ではなく、大造じいさんと残雪の戦いや大造じいさんの心情の変化、残雪への思いの強さを読みとっていた。
2	なぜ、がんを捕まえるのか。 なぜ、がんを食べるのか。 がんは、美味しいのか。 ⇒心情には全く、気持ちが向いていない。	残雪を素晴らしいと思っている大造じいさん。 残雪がけがを治して、元気になったらまた戦いたいと思っている大造じいさん。 ⇒大造じいさんのがんに対する心情の変化を読みとっていった。 また、この児童は、3段落の学習後『大造じいさんとがん』にはまった!とつぶやいた。
3	2年生の時に、カラスが頭がいいと勉強したけれども、がんも頭がいいことが分かった。 大造じいさんが狙っていたのは、がんか残雪か。 なぜ、たにしを5俵も集めてまで？ なぜ、銃を下したのだろう？ もう、戻ってこないのか？ 最後の場面で、なぜ、大造じいさんは嬉しいのか？ ⇒これまでの、国語科の学習を想起して学習に臨むことができている。 書く段落の山場に目を向けて感想を持つことができている。	大造じいさんは、残雪をひきょうなやり方で捕まえたくないから放した。もう一度、元気に戦いたいと思っている。残雪のことを認め、いいやつだと思っているし、また、戦うのを楽しみにしている。 ⇒残雪の姿に心をうたれ、まるで人に対しているかのように認めている大造じいさんの心情、晴れ晴れとした大造じいさんの様子にも迫ることができている。

(2) 児童生徒の学習の成果について検討して下さい。授業前、授業後に児童生徒が答えられたことは、先生の事前の想定や「期待する解答の要素」と比べていかがでしたか。

授業前には、9人中2人が「がんは、なぜ頭がいいのか。」というように、残雪の行動に着目した感想を持ち、「何のためにがんを捕まえるのか。」という感想を持っていた児童が6人であり、大造じいさんの作戦ごとに感想を持つことができていた児童は1人であった。授業後は、『大造じいさん』『残雪』『情景描写』それぞれのエキスパートで、9人全員が『残雪をまるで人のように認めている大造じいさん』の心情を読みとることができていた。

2. 児童生徒の学習の評価（学習の様子）

児童生徒の学習の様子はいかがでしたか。事前の想定と比べて、気がついたこと、気になったことをあげてください。

上記の3つのエキスパートを設定したものの、『情景描写』から、児童がどの程度の読みができるのか不安でもあり楽しみでもある学習であった。しかし、児童は、各段落に1～3文程度の情景描写を見つけ、そこから読みとれる大造じいさんの心情に迫ることができていた。

3. 授業の改善点

児童生徒の学習の成果や学習の様子を踏まえ、次の3点について今回の授業の改善点を挙げて下さい。

- (1) 授業デザイン（課題の設定、エキスパートの設定、ゴールの設定、既有知識の見積もりなど）
- (2) 課題や資料の提示（発問、資料の内容、ワークシートの形式など）
- (3) その他（授業中の支援、授業の進め方など）

(1) 授業後の児童の読みとりを見ると、課題は適切であったのではないかと考える。エキスパート活動では、『大造じいさん』『残雪』『情景描写』の3つのエキスパートを授業者が意図的に分けずに、児童に選択をさせる形で進めたところ、どの子も次の時間は違ったエキスパートでの学習を希望した。また、『情景描写』から、心情を読みとれることを楽しみながら学習する姿があった。

(2) ①発問について

この授業をしながらいつも悩むところが、クロストークである。児童が、ジグソーで見つけたことを出し合い学び合うけれども、その学びを深めることができている場合、出し合いで終わっていいのだろうか。1段落の学習では、大造じいさんの『感嘆の声を漏らす』という表現に十分に着目できずに、読みが深まっていない児童の実態があった。しかし、次時からの螺旋的な学習の中で正しく深まりのある読みができることを想定して、その時間を終わることにした。けれども、この時間の中でこのタイミングで読みを深めたいという授業展開のときには、子どもたちを揺さぶる発問が必要ではないかと考える。『いつ』『どんな言葉で』授業者の出番を効果的に作るのが課題である。

②ワークシートについて

どのエキスパートになっても同じワークシートであること、読みとったことを時には絵でも自由にかけること、文章事実と読みとったことを矢印で結べるようなワークシートであることが大事ではないかと考えて作成した。児童は、自分が伝えたい順番に番号をつけたり、キーワードに丸をつけたり、矢印で結んだりしながら、自分の読みとりがわかり、友だちに伝えるためのワークシート作りができていた。また、1段落の学習では、エキスパート・ジグソーグループでの読みを書く欄しか設けていなかったが、2段落からは、クロストークをした後に『みんなの考えを聞いて、自分の考えを書こう』という欄を設けた。ここでは、個人の読みの変容も把握することができた。授業者の事前準備をできるだけ少なくするためにも、誰でも実践できるためにも簡素化されたワークシートが作成されるといいと思う。

(3) 「知識構成型ジグソー法」の学習を他教科でも時々実践していることもあり、児童はスムーズに移動したり活動したりすることができ、時間も無駄なく学習することができた。また、ネームプレートを板書に位置づけたことで、席移動もスムーズにできた。本校では、算数の研究をしており、その中で【単元の学習計画】と児童に提示している。国語科でも、これを提示し学習を進めたところ、児童が見通しを持って活動することができた。クロストークの際は、文章事実をカードにし、それを提示しながら発表させ、そのカードをもとに学習の後を掲示し、次時の学習につなげた。

学習を進める中で、児童から大造じいさんの残雪を『捕まえない』という気持ちがだんだん少なくなり、『すこいやつ』という気持ちが大きくなり、膨らんでいくという発言があり、それを心情の円グラフで表現することにしたことは、量的に増えるだけでなく膨らみでも表せ、視覚的にとらえることもでき読みを深めるうえで有効であった。

